

研究会報告

第53回 東京医科大学  
免疫・アレルギー研究会

日 時：平成7年5月23日(火)  
午後5時~7時

会 場：東京医科大学病院  
本館6階臨床講堂

世話人：皮膚科学教室 古賀道之

特別講演：New aspects of the pathogenesis  
and therapy of atopic dermatitis

Erwin Schoepf  
(University of Freiburg, Germany)

1. 修飾卵白アルブミン投与による  
IgE抗体産生の抑制  
(免疫学教室)水口純一郎・高田栄子・内田哲也

抗原の性状あるいはアジュバントにより、産生される抗体の種類が異なることが報告されている。我々は、修飾された抗原によるIgE 応答の制御に関する研究を行ってきた。今回、卵白アルブミン(OVA)を、グルタルアルデヒド法により、マウス赤血球或はリボソームに結合させた抗原(OVA-RBC、OVA-liposome)を作製し、その抗原性について検討した。OVA-RBC 或はOVA-liposomeをマウスに投与すると、抗-OVAIgG2a抗体が産生されたが、IgE抗体は検出レベル以下であった。また、予めIgE抗体が産生されているマウスに、OVA-liposomeを投与すると、2次応答型のIgG2a産生が認められたが、IgEレベルは変化しなかった。これらの事実は、OVA-liposome投与により Th1型のヘルパーT細胞が活性化されているということを示唆している。リボソームによる抗原の修飾はワクチン或は脱感作を考える上で重要であると思われる。

2 リンパ球のシクロスポリン感受性の疾患別特異性  
(東京薬科大学臨床薬理学教室) 平野俊彦、岡 希太郎、  
(東京医科大学八王子医療センター薬剤部) 竹内裕紀、  
(同 臓器移植部) 櫻井悦夫、  
(同 第五外科) 斉藤燈、小崎浩一、松野直徒、小崎正巳、  
(同 腎臓内科) 吉田雅治、  
(同 皮膚科) 榎沢慶紀、市川眞喜子、  
(東京医科大学皮膚科) 平田雅子、大井綱郎、古賀道之

目的：免疫抑制療法の対象となる患者のリンパ球のシクロスポリン(c y A)感受性を調べ、その個人差を把握すると共に、疾患群間の感受性差を比較検討することを目的とした。

対象、方法：健常者23名、慢性腎不全(CRF)患者66名、ネフローゼ患者14名、及び乾癬患者15名を対象とし、末梢血リンパ球のc y A感受性をマイトゲン試験法で調べた。

結果：健常者、CRF、ネフローゼ、及び乾癬患者リンパ球に対するc y AのIC<sub>50</sub>の中間値(範囲)は、各々76 (158)、41 (0130)、45 (0141)、及び11 (0124) ng/mlであり、健常者と比べ乾癬患者ではc y A感受性が有意に高かった(p < 0.05)。他群間にIC<sub>50</sub>の有意差はなかった。

結論：CRFではリンパ球のc y A感受性の極めて低い患者が高率に存在する一方、今回の検討結果では、ネフローゼや乾癬患者のc y A感受性は、比較的高かった。

3. シクロスポリンとアロプリノールの併用による  
実験的ぶどう膜網膜炎の抑制

(眼科学) 松浦 岳司、後藤 浩、毛塚 剛、  
山川 直之、松澤 豪、白井 正彦

目的：実験的ぶどう膜網膜炎(EAU)に、免疫抑制薬であるシクロスポリン(CyA)と、キサンチンオキシダーゼ阻害剤であるアロプリノールの併用投与を行い、その発症や病像に及ぼす影響を検討した。方法：IRBP 30μgをルイスラットに接種してEAUを惹起せしめた(A群)。接種と同時にCyA 3mg/kg/日(B群) または、同量のCyAとアロプリノール 100mg/kg/日(C群)を連日投与し経時的に観察した。接種後13日目に病理組織学的、免疫学的ならびに生化学的検索を行った。結果：臨床所見及び組織学的検索の結果、A群に比べB群において発症率・炎症所見が抑制されており、さらにC群ではその抑制がより顕著であった。リンパ球増殖反応も同様の傾向にあった。血清抗IRBP抗体価は3群の間に有意な差はなかった。腎機能障害は認めなかった。結果：CyAとアロプリノールの併用投与はEAUに対して抑制的に作用した。